学校便り 64

孫娘が学ぶ日本語学校

ワシントン日本語学校在籍生徒の祖母より

中口安美

ペンシルバニア州にあるロングウッドガーデンでの家族写真（右端が筆者）

平成最後の今年3月、上の孫娘がワシントン日本語学校小学部を卒業しました。卒業生の女子生徒の大半が袴姿だったことに大変驚きました。日本の卒業式でも袴を着用するのは女性教師や大学生くらいです。アメリカでの卒業式だからこそ、日本の伝統を守るためにも和の心を重んじて着物を着付けてやるべきだったのではと、内心後悔しました。

私は1年のうち半年は日本で暮らし、残りの半年はワシントンDCに住む娘宅に滞在して、日米を行き来しています。こちらにいる時は孫たちの宿題を手伝ったりしていますが、私がいない間、娘夫婦は多忙でなかなか日本語での勉強を見てやれていないと思います。

幸いなことに、孫娘は小学校の6年間、毎年夏に大阪府守口市に住むもう一人の娘宅に滞在し、約1か月間体験入学をすることができました。日本での様々な教科の授業はもちろん、集団登校、校内清掃、給食当番など日本ならではの学校生活を体験し、担任の先生からはアメリカではつい週1日だけの授業なのに、よく頑張っているとほめていただきました。

大阪府守口市の小学校で孫娘が体験入学

将来日本に住む予定がなく、どちらかといえば永住組になる孫は、その境遇に甘んじてか、音読や漢字の学習に今ひとつ努力が足りないように感じていたのですが、いつの間にか私が日本にいる間でも、宿題や漢字の学習を自ら進んでやるようになっていました。これはおそらく日本語学校の厳しくも優しい先生方が熱心に指導してくださるおかげだと思っております。クラスのお友達の影響もあったのでしょう。

先日、孫の卒業アルバムを開いてみました。思い出の欄には「運動会が楽しかった」というコメントが目立ちました。将来の夢には、科学者、医者、獣医、弁護士、イラストレーター、デザイナー、教師、スポーツ選手、パティシエ、海軍、海洋生物学者、武闘家などとあり、将来が楽しみなクラスメイトばかりです。きっと国際的な舞台でリーダーとして活躍されることでしょう。

日本語学校では保護者として安全当番を務めている他、特別授業の際にはお手伝いとして生徒さんたちの誘導にあたらせていただき、去年は桂三輝さんの落語、今年は宇宙航空研究開発機構（JAXA）の小谷勲様による宇宙教室を生徒さんと共に受講することができました。

孫たちは、両親とは英語、私とは日本語で会話をしていますが、5歳の孫は「英語で話したら、ばあばにはわからないよ」と気遣ってくれたり、上の孫は家族の会話を通訳してくれたりして、嬉しく思っています。上の孫が幼い頃、私が落語の「手水廻し（ちょうずまわし）」をして聞かせると、何度も繰り返し聞きたがり、長旅のドライブも苦にならなかったことは良い思い出です。

アメリカでは、数々の家族旅行に出かけました。今までにナイアガラ、グランドキャニオン、イエローストーンをはじめ、大好きなジャズの町、ニューオーリンズ、最南端のキーウエストを回り、カナダではセントローレンスでのホエールウォッチング、プリンスエドワード島、モントリオールでのジップライン体験など、生涯で最初で最後の思い出がたくさんできました。近郊の小さな町を巡るのや、メジャーリーグ観戦も楽しい家族イベントです。

座右の銘である「日々感謝」の気持ちを忘れずに、日本語を学んでいる孫たちと共にこれからもアメリカ生活を満喫したいと思っています。

西郷牧師の
世相を斬る 32

西郷純一牧師

中村哲氏を偲んで

「クリスマス」が、キリスト教の開祖イエス・キリストの誕生を記念する日であることは、日本でも広く知られている。しかし、その「クリスマス」に先立つ4回の日曜日を含む期間を「アドベント（待降節）」と呼び、ご降誕の意味を噛み締めつつ「祝賀」の準備をする時節であることを知る人は多くない。アドベント中4本の蝋燭に、毎週一本づつ灯がともされる。それらの蝋燭は、クリスチャンたちが、イエス・キリストの来臨によって人類にもたらされると信じる「希望」「平和」「喜び」「愛」を象徴する。

今年のアドベントは12月1日に始まった。すでに1本目の「希望」の蝋燭には灯がともされ、2本目の「平和」の蝋燭点火を前に、世界中で「平和」への祈りが捧げられていた12月4日、皮肉にも、新たなテロのニュースと訃報が世界を駆け巡った。アフガニスタンで、同国の人道・復興支援のため30年にわたりその生涯を捧げた医師中村哲氏が、現地でテロリストの銃弾に倒れ、死亡したという知らせであった。

同氏は、第二次大戦終結間もない1946年福岡に生まれ、同地のミッション・スクールに通い、若き日にクリスチャンとして洗礼を受けられた。医大卒業後、国内の病院勤務を経て、1984年パキスタンのハンセン病院に赴任。89年からはアフガニスタンに活動拠点を移した。旱魃と共に40年の長きにわたる紛争の影響で、水の供給に代表されるインフラ設備が完全に破壊された同国に住む人々を、貧困、飢餓、病気、更には社会的性差別等の諸問題から救おうと、医師の分野を超えた果敢な救済活動を試みて来られた。彼を通して完成された飲料用井戸は約1600、灌漑用井戸13、地下水路再生38等々。

この間、中村氏は生涯、神のために剣を抜いて戦おうとした弟子のペテロに「剣を元に納めなさい。剣を取るものは剣で滅びます」と言われたキリストに倣う者として、暴力・武力によっては、勝利も、平和もなく、ただ争いの連鎖を生むだけであると堅く信じていた。9・11の連続テロで、世界が「報復」に「正当」というライセンスを与えようとしていたとき彼は言った。「砂漠の上に爆弾を落とすのはやめてもらいたい。そこには人々が生きているんだ」「テロリストを爆撃で殺せばいいんだっていう、この答えの出し方は最悪です」と。徹底した非戦論を貫いた。

非戦、非武装、無抵抗での戦いは、時に、愚かで、幼稚で、無力そのものと感じられる。決して正義の名のもとに無謀に自らの命を捨てることを勧めているのではない。第一私自身、自らにそんな勇気があるのかとたじろぐ。中村哲氏自身、同僚の伊藤和也氏の殺害事件以降、他の若手スタッフの帰国を奨めていたようである。もう死ぬのは自分だけで良いと言うかのように。

命は一つも無駄にされてはならない。今後、このような働きは、個人と個人を超えてのより広い協力関係の中で、ひいては国家レベルでの支援・保護・主導のもとに継続されていくべきであると信じる。しかし、忘れてならないことは、伊藤氏にしても、中村氏にしても、ミッション達成半ばでの不本意な死は、決して無駄な死ではないことである。

キリスト教史上最悪の迫害者の一人パウロは、聖徒ステパノを始めとする大勢のキリスト者を迫害し、殺害した。しかし、その事実と経験が、後に彼をキリスト教史上最大の回心者・宣教者としたのである。

「自分で復讐してはいけません。もしあなたの敵が飢えたなら、彼に食べさせなさい。…そうすることによって、あなたは彼の頭に燃える炭火を積むことになるのです」（聖書）。

ステパノは自分を殺す者のためにその救いを祈った。中村氏もまた自らの宗教を超えてアフガン人を愛し、彼らのためにモスクやマドラサを建設。それが平和への長く険しい道の一歩である。

■西郷純一牧師
現ジャパニーズ・クリスチャン・コミュニティセンター・オブ・ワシントン主宰。巡回伝道者・牧師。日本で聖宣神学院卒業後久我山宣教会副牧師、1980ビリーグラハム東京大会、および1982日本伝道会議での事務局主事を経て渡米。アズベリー大学にて聖書学専攻、同言語学副専攻で学位取得。アズベリー神学校牧会神学修士、プリンストン神学校旧約学修士を取得。ドルー大学旧約学PhD課程・教科課程終了後中退。米国で1991～2018年プリンストン日本語教会、ニューヨーク日本語教会、およびワシントン・インターナショナル日本語教会の開設・牧会に携わる。

英語De岡崎詩織敬語

⑤招待への返事の仕方

日本の年末は極めて慌ただしいですが、米国でもホリデーパーティーなどの予定が立て込みます。多くの誘いが重なると、適切な手土産や失礼に当たらない断り方など、気を遣う場面も増えるでしょう。そこで今回は、個人的な招待への返事の仕方を取り上げます。

欠席する場合には、招待へのお礼とともに、***This sounds like a wonderful event, and I'm sorry to miss it because of work commitments.*** や、***I would love to attend, but I'm afraid I will be out of town visiting my parents.*** など、都合がつかない理由も含めて丁寧に断ると、次回も声をかけてもらえる可能性が高まるでしょう。

出席可能となると、今度はいろいろ確認すべきことが出てきます。他に予定があるものの部分的に出席したい場合には、***Would you mind if I arrive half an hour late, since I have a conference call that ends at 6pm?*** や、***May I leave around 8pm to prepare for my business trip the next day?*** など、理由や時間も含めて聞くとよいでしょう。

家族や恋人（「プラスワン」）を連れてきてよい場合は、***I would love to attend with my spouse, Tim Cratchit.*** など、自分との関係と名前を書くといいでしょう（家族で別姓の方も多いため、ネームカード等がある可能性のある公式なイベントでは、フルネームで書いた方がホストに親切です）。お子さんと参加したい方は、***May I bring my ten-year-old daughter?*** など、年齢も含めて確かめた方がよいでしょう。

ホームパーティーの場合は、ポットラックでなくとも、***Please let me know if there's anything that I can bring.*** と聞くと丁寧です。多様な人たちが集まる米国は、健康や信念に基づく食事制限がある方も多く、アレルギーにもとても気を遣いますので、何か持参する前に、***Do you or your guests have any food allergies or dietary restrictions?*** と確認した方が安全でしょう。

少し難しいのは、集合時間です。座って食事をする場合は遅れると失礼にあたりますが、立食のビュッフェやポットラックであれば、時間通りに行くと他に誰もおらず、忙しいホストに気を遣わせてしまうこともあります。事前に説明がない場合には、***Am I correct that this is a sit-down dinner?*** などと確認できます。さらに ***I plan to arrive before 7pm.*** などと到着予定時刻を知らせると、もう少しゆっくり来た方がよければその旨お返事があるでしょう。

この時期は町中がライトや飾りつけでキラキラしていますが、様々なイベントで人と会ったり、年内に仕事をまとめたり、プレゼントを買ったりと忙しいあまり、せっかくの景色に気付かず素通りしてしまうことがあります。たまには長い「やることリスト」を忘れ、温かい飲み物を手に一息ついて、今の季節を楽しむのもいいかもしれません。

2010年代も残りわずか。皆様、よいお年をお迎えください。

■岡崎詩織
国務省を含む様々なクライアントを持つ通訳者（逐次・同時通訳）。シアトルで生まれ、ホノルルと東京で育つ。在米・在英日本大使館で勤めたほか、国連開発計画コソボ事務所と国連事務局でインターンを経験、2013年より米日カウンシルで勤務。ダートマス大学で学士号、コロンビア大学の国際公共政策大学院とジャーナリズム大学院で修士号を取得。ブログ「tabula sarasara」更新中。